

す。

〔伊勢物語上〕むかし男ありけり。○略申あづまのかたにすむべき所もとめにとてゆきけり。○申むさしの國と、ゑもつふさの國とふたつが中に、いとおほきなる河あり、その河の名をばすみだ川となむいひける。その河のほとりにむれゐておもひやれば、かぎりなくとをくもきにけるかなとわびをれば、わたしもりはやふねにのれ、日もくれぬといふに、のりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるおりしも、しろき鳥のはしとあしとあかきが、ゑぎのおほきさなる水のうへにあそびつゝいを、くふ京には見えぬとりなれば、人々みしらず、わたしもりにとへば、これなん都鳥と申といふをきゝて、

名にしおはゞいざこと、はん都鳥我思ふ人はありやなしやと、とよめりければ、舟人こそぞりてなきにけり。

〔後拾遺和歌集九 羯旅〕いづみへくだり侍けるによる都鳥のほのかになきければ、よみ侍ける。

和泉式部

こと、はゞありのまにくみやこ鳥都のことを我にきかせよ

〔古今著聞集二十一 魚虫禽獸〕院御隨身右府生秦頼方、みやこどりを或殿上人にまいらせたるを、成季にあづけられて侍りくる物なども、ゑらで萬の虫をくはせ侍も、所せく覺へて、ゆ、しきものかいなるによりて、小田河美作茂平がもとへやりてかはせ侍しを、建長六年十二月廿日節分の御かた、がへのために、前相國兼經○藤原の富小路の亭に行幸なりて、次日一日御逗留ありし、相國みやこ鳥をめして、叡覽にそなへられけり、返歌つかはすとて、少將内侍紅のうすやうに歌を書て、鳥につけて侍ける。

春にあふ心ははなのみやこどりのどけき御代のことやとはまし、おとゞ又女房にかはりて、